

A 語句の意味と読み

(1) いただく。(目上の人から) ちょうだいする。 / 「与ふ」の反対側の動作。ここは高綱が源頼朝から名馬をいただいたこと

(2) 読み=くいければ / 「くふ」=かみつく。食いつく。 / ★現代語の「食べる」ではない。馬にも人にもかみつく荒馬だという描写

(3) 読み=はるび (教科書によっては「はらおび」とルビを振る。お使いの教科書のルビに合わせる) / 「のびて」=(帯が) ゆるんで。 / ★妊婦の「はらおび」と混同しやすい。馬具の腹帯は「はるび」と読むのがふつう。鞍を馬の背にとめる帯で、ゆるむと鞍がずれて落馬するから、渡河前の点検はもっともらしく聞こえる

(4) そのあいだに。そのすきに。 / 「ま (間)」=あいだ。梶原が腹帯を締め直している、そのすきに

(5) だます。計略にかける。 / ★「はかる (計画する)」とだけ覚えていると訳せない。ここは「だます」

(6) まっすぐ一直線に。(流れに押されず、「一」の字のようにまっすぐ) / 流れに押されて下流へ流された梶原の馬 (磨墨) と対比されている (磨墨が流される場面は、この抜粋には入っていない)

(7) 読み=こういん / 意味=子孫。 / 名乗りで家柄の高さを示す語。「宇多天皇より九代の後胤」=宇多天皇から数えて九代目の子孫

B 文法

(8) もとの形=「給はり」(ラ行四段活用「給はる」の連用形)。「給はり」+「たり」で促音便になり「給はつ (たり)」となっている。 / 「〜り+たり」が「〜つたり」になるのが促音便。「乗つたりけり」も同じ形

(9) 結び=「たる」(完了・存続の助動詞「たり」)、活用形=連体形。「られ」=受身の助動詞「らる」の連用形 (=名づけられた)。 / ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形。「られ」は、名づけた人が本文に示されず、馬のほうを主語にして「(その荒さゆえに) そう名づけられた」と読むので受身。直前の「馬をも人をもあたりをはらつてくひければ」が名の由来を語っているのが決め手 (名づけ主を頼朝と取って尊敬に読む余地もあるが、学校では受身で通す)

(10) 尊敬の補助動詞「給ふ」(ハ行四段) の命令形。「お締めなさい」の意。 / 四段の「給ふ」は尊敬、下二段の「給ふ」は謙譲。ここは命令形なので四段=尊敬

(11) 「らん (らむ)」=現在推量。目の前の事態を推し量る用法で、「なるほどそうであろう・もっともだ」と訳す。 / 「けん (けむ)」=過去推量 (〜たのだろうか)、活用形=連体形 (係助詞「や」を受けた結びだから)。 / ★「けん」を単なる過去の「た」で訳すと×。語り手が梶原の心の中を推し量って語っている。「とや〜けん」の「や」が結びを連体形にしている

(12) ⑦・⑨・⑬は文の途中に置かれた係助詞「ぞ」で、結びの活用語をいずれも連体形にする (⑦の結び=「ける」=過去の助動詞「けり」の連体形、⑨の結び=「たる」=完了・存続の助動詞「たり」の連体形、⑬の結び=「たる」=同じく

「たり」の連体形)。これに対し⑮の「ぞや」は文末に置かれた終助詞「ぞ」+間投助詞「や」で、下に結びの活用語が続かないので係り結びではなく、「〜であるぞ」と断定・強調して言い切る名乗りの型である。 / ★この場面は「ぞ」の連発が特徴。決め手は「ぞ」の位置。文の途中の「ぞ」は係助詞で結びが連体形、文末の「ぞ (や)」は終助詞で結びを求めない

(13) 「たばから」=ラ行四段活用「たばかる」の未然形 / 「れ」=受身の助動詞「る」の連用形 / 「ぬ」=完了の助動詞「ぬ」の終止形。全体で「だまされてしまった」。 / ★「ぬ」を打消の「ず」の連体形と取らないこと。決め手は「ぬ」の下が引用の「と」であること=上は終止形。打消の「ず」なら終止形は「ず」であって「ぬ」にはならない (打消の「ぬ」は連体形)。よってこの「ぬ」は完了。なお「未然形に付けば打消・連用形に付けば完了」という一般則は、助動詞「る」の未然形も連用形も同じ「れ」なので、この語では決め手にならない。意味の上でも、続く「やがて続いてうち入れたり」から、だまされたと気づいた場面だと分かる

(14) 「はやし」=形容詞 (ク活用) の終止形。「といへども」=「〜といっても・〜けれども」。逆接を表す (「と」+「言へ」(已然形) +「ども」)。 / 「ども」は已然形に付いて逆接確定条件をつくる。急流だったのに渡りきった、という流れをつかむ

C 主語・指す内容・敬意の方向

(15) 謙譲語 (「給はる」=いただく)。地の文なので、作者から、馬を与えた側である源頼朝への敬意。 / 謙譲語は動作を受ける側 (ここは馬をくださった頼朝) を高める。地の文の敬語は作者からの敬意

(16) 会話文なので、話し手である佐々木四郎高綱から、腹帯を締める相手=梶原源太景季への敬意。 / ★ていねいな敬語を使っておきながら中身は計略、というのがこの場面の読みどころ

(17) 梶原が高綱の言葉を信じて、左右の鎧を踏んで体を浮かせ、手綱を馬のたてがみに投げ捨てて、腹帯を解いて締め直している、そのあいだ (すき)。 / 直前の一文がそのまま答えになる

(18) 佐々木四郎高綱。 / 名馬「いけずき」に乗り、大綱を打ち切りながら渡ったほう。流されたのは梶原

D 口語訳

(19) この川は西国一の大河ですぞ。(あなたの馬の) 腹帯がゆるんで見えますよ。お締めなさい。 / 「のぶ」=ゆるむ。「見えさうは」は「見えますよ (ぞ)」と念を押すていねいな言い方。「給へ」は尊敬の命令形なので「お締めなさい」と訳す

(20) 梶原は、なるほどそうであろうと思ったのだろうか、左右の鎧を踏んで体を浮かせ、手綱を馬のたてがみの上に投げ捨てて、腹帯を解いて締め直した。 / 「ゆがみ」=たてがみ。「けん」は過去推量なので「〜と思ったのだろうか」と訳す

(21) そのすきに、佐々木はさっと (梶原を) 追い抜いて、川へざぶっと乗り入れた。梶原は、だまされたと考えたのだろうか、すぐに続いて (川へ) 乗り入れた。 / 「やがて」=すぐに。現代語の「やがて (そのうち)」ではない

(22) 宇治川 (の流れ) は速いといっても、まっすぐ一直線にざっと渡って、向こう岸へ (馬を) 駆け上がらせた。 / 「と〜ども」=〜といっても・〜けれども (逆接)

E 内容・記述

(23) 馬に対しても人に対しても、あたりかまわずかみつってしまう、それほど気性の荒い馬だったから。／直前の「馬をも人をもあたりをはらつてくひければ」が理由。名前そのものが馬の荒々しさを表している

(24) 梶原に腹帯を締め直させ、そのために手間取っているすきに自分が先に川へ乗り入れて、先陣（一番乗り）を取ろうとしたから。表向きは親切な忠告に見せかけた計略（たばかり）である。／★「親切に注意した」で終わらせない。直後に「そのまに佐々木はつつと馳せ抜いて」と続くのが証拠

(25) 一つは、腹帯がゆるんでいると偽って梶原を出し抜いた機転（たばかり）。もう一つは、頼朝から賜った天下一の名馬「いけずき」の力で、大綱を打ち切りながら急流を一字に渡りきったこと。／★武勇だけでなく知略でも勝った、という二本立てが主題。片方だけだと減点されやすい

F 文学史・背景（本文全体をふまえて答える）

(26) 鎌倉時代に成立した軍記物語。この場面は巻第九に収められている。琵琶法師が琵琶に合わせて語り伝えた（平曲）ことでも知られる。／冒頭「祇園精舎の鐘の声…」の諸行無常が全体を貫く主題

(27) 宇多天皇から数えて九代目の子孫であり、佐々木三郎秀義の四男である、と告げている。名乗りをあげるのは、敵味方に自分の家柄と名を知らせ、先陣という手柄を確かなものとして認めさせるため。／先陣は武士にとって最高の名誉。名乗らなければ手柄が誰のものか分からない

(28) 佐々木高綱＝生食（いけずき）、梶原景季＝磨墨（するすみ）。どちらも源頼朝から賜った名馬である。／★二頭の名と乗り手の取りちがえが最大のミス。磨墨に乗った梶原は流れに押されて下流へ流される（その場面はこの抜粋には入っていない）

【現代語訳（全文）】

【馬の描写】

佐々木四郎が（頼朝から）いただいた御馬は、黒栗毛の馬で、きわめて太くたくましいが、馬にも人にもあたりかまわずかみついたので、「いけずき（生食）」と名づけられた。

【腹帯の駆け引き】

佐々木四郎が、「この川は西国一の大河ですぞ。（あなたの馬の）腹帯がゆるんで見えますよ。お締めなさい。」と言われたので、梶原は、なるほどそうであろうと思ったのだろうか、左右の鐙を踏んで体を浮かせ、手綱を馬のたてがみの上に投げ捨てて、腹帯を解いて締め直した。

【先陣を出し抜く】

そのすきに、佐々木はさっと（梶原を）追い抜いて、川へざぶっと乗り入れた。梶原は、だまされたと思ったのだろうか、すぐに続いて（川へ）乗り入れた。

【宇治川渡河】

佐々木は、太刀を抜いて、馬の足からみついた大綱をつぎつぎとぶつぶつと打ち切り打ち切りして進み、生食という天下一の名馬に乗っていた。宇治川の流れは速かったけれども、まっすぐ一直線にざっと渡って、向こう岸へ（馬を）駆け上がらせた。

【名乗り】

（佐々木は）鐙を踏ん張って立ち上がり、大音声をあげて名乗ったことには、「宇多天皇から九代目の子孫、佐々木三郎秀義の四男、佐々木四郎高綱、これが宇治川の先陣（一番乗り）であるぞ。我こそはと思う人々は高綱と組み合え。」と言って、大声でわめきながら（敵陣へ）駆けていく。